

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03348

研究課題名(和文) インドにおける因果の思想の研究

研究課題名(英文) Study of various concepts of causality and karma in Indian philosophy

研究代表者

丸井 浩 (Marui, Hiroshi)

武蔵野大学・経済学部・教授

研究者番号：30229603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：道徳的因果(因果応報)と物理的因果(宇宙生成論、存在論)とが絡み合いつつ展開してきた「インドにおける因果の思想」の諸相を、ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派の多元的、機械論的實在に軸を置きつつ、ヴェーダーンタ学派の一元論および実体概念に依拠しない仏教の縁起思想をも視野に収めて、コアメンバー8名による4年間の共同研究を行い、因果性の確定問題を主題としたパネル発表1回のほか、学術論文22本と口頭発表(学会発表と講演)33件の研究成果をあげ、253頁の研究成果報告書をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インド哲学の因果性問題を扱う本格的な先行研究がほぼ皆無だった実情を踏まえて、インド哲学諸派の因果論を、学派単位、資料単位の個別研究と、学派横断的、比較哲学的な総合研究の両面から掘り起こした結果、重要な新知見・新視点が得られた。因果性自体の主題化はかなり後代だとしても、各学派の初期段階にすでに世界生成論や身体生成問題等と絡んで因果論が展開していること、文法学の語意確定法に典型的に現われる因果性確定法は、各学派固有の思想体系と絡みつつ種々の合理的思考を発達させたが、他方、解脱論では生者必滅の因果律からの超克を図る議論が学派横断的に認められることなどが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Very few comprehensive studies have been made about the various concepts of causality and karmic retribution in Indian philosophy and Buddhist thought. In order to challenge this central theme of philosophy, we have organized the project team which consists of five scholars of Nyaya-Vaisesika (the representative pluralistic System of Indian philosophy), one scholar of Vedanta (the representative monistic System) and two scholars of Buddhist philosophy (the dynamic philosophical system that developed the thought of interdependence). Our four-year research scheme has been arranged as an organic coordination of each individual study with joint research. In the third year we presented a panel to discuss the topic of how to determine the causality with a special reference to anvaya-vyatireka. Twenty two papers were published and thirty three oral presentations were made in connection with the present project. A report was produced with 253 pages.

研究分野：インド哲学

キーワード：インド哲学 因果性確定問題 因果応報思想 因果性の超越 ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派 ヴェーダーンタ学派 仏教論理学 縁起思想

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 因果性は哲学の根本問題であり、かつ因果応報という道徳的、宗教的問題とも関わる。仏教を含むインド哲学諸派における「因果性をめぐる議論」の諸相とその思想的展開に関して、今まで本格的に考察されることは殆どなかった。日本では仏教思想研究会編『仏教思想3因果』(1978)が唯一の専門書と言えようが、インド仏教中心の各論が大半であり、パラモン系六派哲学の因果論は全20章中わずか2章にすぎない。一方、仏教(アビダルマと仏教論理学中心)の因果論に関しては『梶山雄一著作集』(全8巻、2008-2013)が注目に値し、「中観哲学と因果論」「推理と因果関係」「実在者と観念間の因果」「業報論の超越」など因果問題の諸相に踏み込んでいる。これに「認識因果論」(御牧克己「刹那滅論証」『講座大乘仏教9』1984)と「存在と因果」(稲見正浩『シリーズ大乘仏教9』2012)を加えれば、仏教論理学関係の因果論の重要な論点がほぼ出揃う。海外では、インド人学者によるニヤーヤ・ヴァイシェーシカの因果論に関する若干の研究書が見られ、特にS. Bhaduri著*Studies in Nyaya-Vaisesika metaphysics* (1947)の第12章「因果性」は、ウダヤナの『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』とその注釈書に見られる因果論に対して、D・ヒュームの経験論哲学を視野に収めた批判的考察が加えられている。また最近ではA. R. Mishra著 *Nyaya concept of cause & effect relationship* (2008)が、両学派の因果論関係の主要な該当資料を収集している。ただしテキストの扱いと原文解釈には難点が多い。最も幅広く、かつ正確な文献解読を踏まえた鋭い思想分析としては、W・ハルプファスの“Karma, apurva, and “natural” causes: Observations on the growth and limits of the theory of samsara” (1983)、*On being and what there is* (1992) 第3章や*Tradition and reflection* (1991) 第9章が傑出している。そして最も包括的な成果は彼のドイツ語著作『インド思想における業と再生』(2000)であろう。ただしアビダルマおよび仏教論理学派の因果論をも視野に収めた比較分析は見られない。つまりインド哲学諸派(六派哲学)と仏教の両者を含めた因果性研究は世界的に見ても皆無に近い。また日本では仏教論理学派の因果論に関する分析は進んでいるが、インド哲学諸派の因果論との比較は乏しい現状にあった。

(2) しかしインド哲学諸文献における因果をめぐる議論は非常に盛んであったと思われる。ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派に限ってみても、因果性自体を主題化した議論が新ニヤーヤ学派時代には盛んになるが、最初期でもすでにサーンキヤ学派との間で、結果物(布)は予め原因物(素材である糸)に潜在的に存在するか否かをめぐり大論争があり、また後代にはミーマーンサー学派と結果産出力(シャクティ)に関して激論が交わされた。さらに、世界の創造と生成の原因は何か、因果応報と神との関わりはどうか、身体の生成の原因は何か などという因果論の諸相は『ニヤーヤ・スートラ』にすでに論じられている。またヴァイシェーシカ学派のカテゴリー論の構築に因果性が密接に関係しているであろうことは、上記のMishraの資料集からも伺われる。また他のインド哲学諸派も事情は似ているのではないかと予想される。したがって、因果をめぐる諸議論を包括的に考察するために、関連する多様な思想的文脈を文献実証的に掘り起こしつつ、各学派固有の思想体系(たとえば一元論か多元論かなど)との相関性や、学派横断的な時代思潮との関連などを慎重に検討しつつ、因果性関連の議論展開の系譜を多面的に解明する総合的な共同研究が必須となる。

(3) このような研究状況を踏まえて、コアメンバー8名による4年間の研究企画を策定した。4名(丸井、和田、岩崎、日比)はインドの多元的実在論を代表し、後代、精緻な因果性定義論を展開したニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の第一線の研究者である。また仏教の因果論に精通した国際的仏教研究者2名(桂と稲見)と、インドの一元論思想を代表するヴェーダーンタ学派の未開拓分野の研究をリードする専門家1名(加藤)が参画した研究チームの陣容である。

2. 研究の目的

(1) 【統一目的】因果応報思想と、万物の根源・根本要素から世界の生成・変化を説明する形而上学的思弁とが絡み合いつつ展開してきたインドの因果の思想を、多元的实在論に立脚したニヤーヤ・ヴァイシェシカ両学派を中軸としつつ、それと対照的な一元論に依拠するヴェーダーンタ学派、および実体概念に依拠しないダイナミックな縁起思想を展開した仏教哲学をも視野に入れ、4年間、組織的な共同研究を展開して、因果論の諸相とその思想的展開の系譜解明に資する重要な新知見を拓いて、成果を内外に積極的に発信することを統一目的とした。

(2) その統一目的を達成するために第一には、仏教を含むインド哲学諸派において、「因果の思想」ないし「因果性を主題とする議論」として括れる議論・論争を、学派単位ないしテキスト単位で抽出した上で、他学派あるいは他の文脈における類似した因果性関連の議論と比較検討して、学派横断的な共通点と、学派固有の思想的特殊性の所在を探求する。

(3) 第二には、「因果性確定問題」「因果性と時間」「因果性の本質」「因果性の超越」などという学派横断的、比較思想的、思想史的に重要な巨視的視点を作業仮説的に設定し、そこから個別議論を整理し比較分析して、インドの「因果の思想」を主題テーマ的に解明する。

(4) 第三には、因果性をめぐる諸学派間の論争を収録するテキスト資料を解読し、学派横断的な議論や共通の問題意識、および各学派固有の思想・概念を解明して、インドの因果の思想の共時的かつ通時的（思想史的）な複層性の具体相をケーススタディ的に明らかにする。

(5) 上述の3つの目標下で明らかになった研究成果を、関連する先行研究と照らし合わせ、今後の研究課題の所在を明確にするために、重要な先行研究の洗い出しと再評価を試みる。

3. 研究の方法

以上の統一目的と4つの目標を達成するために、以下の研究方法を採用した。

(1) 研究組織のコアメンバーは、研究代表者、研究分担者4名（2019年度は5名）、研究協力者3名（2019年度は2名）の8名から成る。組織全体の研究活動を統括・運営する総括班を代表者丸井のもとに設置し、学派単位の研究班を3つ立てた。中核はニヤーヤ・ヴァイシェシカ研究班（N-V班）であり、丸井・和田・岩崎・日比・渡邊の5名から成る。ヴェーダーンタ研究班（Ved班）は加藤が、仏教研究班（仏教班）は桂・稲見が所属。各班は学派単位の研究課題を推進すると共に、上記の目標との有機的連関を図り、学派横断的、比較思想的観点を重視した。毎年2回コアメンバー会議を開き、研究組織全体の活動計画の方針策定等を討議した。

(2) まずN-V班としては、丸井が『ニヤーヤ・スートラ』とその注釈書に見られる因果論を概観した上で、特に人間の身体の発生と因果の道理との関係をめぐる第3章第2節の論争を分析した。また9世紀末の『ニヤーヤ・マンジャリー』第5章の文意認識成立プロセスの説明方法をめぐる長大な学派内論争を解読し、仏教の刹那滅因果論との類似性を探った。そのほかMishraの資料集（既述）の価値評価をかねて、初期ヴァイシェシカ学派の因果論とカテゴリー論との関係をも概観した。一方、和田はシャシャダラ作『ニヤーヤ定説の灯明』（14世紀頃）に見られる因果性定義（「原因性論争」）を精読し、新ニヤーヤ学派初期の因果性概念の学派横断的および比較思想的な意義を探った。他方、岩崎と日比は、ニヤーヤ学派最大の理論家ウダヤナ（11世紀）の因果論をさぐるために、ウダヤナ哲学を継承・発展させたヴァイシェシカ哲学者ヴァッラバ（12世紀）の神の存在論証を解析し、仏教徒との論争の意味を解明した。なお非常に難解な同箇所を解読と思想分析に際しては、ハワイ大学海外研修期間（2016年度）にインド哲学研究の世界的権威A・チャクラヴァルティ教授から貴重な指導が受けられた。

(3) Ved班では加藤が三つの課題に取り組んだ。一つは『ブラフマ・スートラ』における宇宙

生成論を扱う箇所に関する解釈史の中から、特に仏教の刹那滅因果論を批判するパースカラの註解をテキスト批判を踏まえて精読する企画。二つ目は、シャンカラ（8世紀）の因果性確定法の概念（*anvaya-vyatireka*「肯定的随伴・否定的随伴」）の意味をめぐる国際学界での有名な論争を再評価するために、大文章「汝はそれなり」の意味理解に関するシャンカラと直弟子スレーシュヴァラの解釈を再検討する企画。三つ目は、W・ハルプファスのドイツ語著作『インド思想における業と再生』の和訳・解説である。

(4) 仏教班では、仏教全般に精通する国際的仏教研究者である桂が、第一に初期仏教から部派仏教（アビダルマ）、竜樹までの仏教の因果思想を概観し、パラモン系インド哲学諸派の因果論との共通点と相違点をさぐる企画を担当した。他方、稲見はダルマキールティ（7世紀）とその後継者たち（仏教論理学派）の因果論全般を、日常的な真理レベルと究極的な真理レベルの両面から接近して、その特質をまとめるとともに因果性超越志向の顕著なプラジュニャーカラグプタの主張、それに対するニヤーヤ学者の批判、そしてそれに対する仏教側からの再批判という一連の論争を跡付けることを試みた。また桂・稲見の両氏は、志賀直哉氏（京都産業大学教授）が主催する研究会の共同研究者として、シャーンティラクシタ著『タットヴァサングラハ（真理綱要）』およびカマラシーラ注『パンジカー』（TPS）の第9章「行為とその報いの関係の考察」の写本による校訂作業をともなう精読プロジェクトに参画した。

(5) 共同研究としては、合同研究会を6回開催し、最終の2019年度は夏季合宿（松江、2泊3日）を行った。またコアメンバー6名によるパネル発表を企画（2018年度）。このほか本研究成果を啓蒙的研究書としてまとめる出版企画を立ち上げ、その準備作業の一貫として、本研究の主要な研究成果を収録した詳細な報告書を丸井が編集した。個別研究の成果は、国内外の学会や、国際会議、招待講演などで積極的に発信し、国内外の学術雑誌や論文集に論文として発表した。専用サイトも開設した（<https://www.mandalakupa.com/project>）。

4．研究成果

(1) 共同研究の最大の成果発表は、日本印度学仏教学会第69回学術大会（2018年9月、東洋大学）におけるパネル発表「インド哲学における因果性確定の方法をめぐって」である。紀元前5世紀頃にシャカ族の聖者（ブッダ）が覚ったとされる縁起の道理は、しばしば「此れあれば彼あり。此れなければ彼なし」という定型句を伴って教説されたが、これは後に「肯定的随伴関係（*anvaya*、「A（火）がある時にB（煙）がある」）と否定的随伴関係（*vyatireka*、「A（火）がない時にB（煙）がない」）」と呼ばれる「因果性確定の方法」に相当し、「インドの帰納原理」と呼ばれることもある。この因果性確定問題を中心にしつつ、インド哲学における因果性の一般問題と特殊問題を解明するために4名が研究発表と討論を行った。和田氏は新ニヤーヤ学派のシャシャダラが提示する難解な因果性定義3種を読み解き、そこに*anvaya-vyatireka*法の基本概念は「結果に対する原因の恒常的先行性」として活かされつつも、常住なものが原因となるケース（*vyatireka*適用不可）をも含み込んだ因果性定義の存在を指摘し、また「原因の恒常的先行性」に付帯条件を付して定義の過大適用を回避している事実を看取り、*anvaya-vyatireka*法のもつ限界を十分に意識した上での因果性定義であることを明らかにした。稲見氏はダルマキールティによる因果性の諸規定を整理・分析し、*anvaya-vyatireka*法における「存在」「非存在」を「知覚」「非知覚」に読みかえ、「Aが知覚される時、これまで知覚条件が備わっていながら知覚されなかったBが知覚される」かつ「(他の原因がそろっていても)Aが知覚されない時、Bが知覚されない」と厳密に規定し直す意味を明確にした。また因果性は世俗内真理においてのみ有効であるばかりか、因果性確定は厳密には論理的にも不可能で

あるとしてダルマキールティさえ批判して、究極的真理のもとでは因果性は超越されることを強調するプラジュニャーカラ・グプタの宗教哲学に言及した。他方、加藤氏はウパニシャッドの大文章「汝はそれなり」から梵我一如への悟入に至るプロセスの中にanvaya-vyatireka法の適用を図るシャンカラ（8世紀）の教説において、語意確定のための帰納原理としてこの方法が機能しているのは事実だとしても、それとは別に、誤った「自己」観念を打ち破るための修道法としての意味合いを再検討する余地があることを示し、カルドナによる前田専學批判の若干の修正を提言した。岩崎氏は、ヴァイシェーシカ学派のヴァッラバ（12世紀）の主宰神論証に関する日比氏の精査を踏まえて、論証の論拠（遍充関係）となる「すべての結果物は知的作者をもつ」という特殊な因果性が確定しうるか否かをめぐり、仏教徒と交わされる論争を分析し、経験を超えた創造神が絡んだ遍充関係（ここでは因果関係）の確定法としては、帰納原理は適用できず、反事実仮想論理に依存するとの論点を掘り起こしたほか、個別的な因果性の確定問題を扱う場合でも、経験的検証を超えた論点に関して見解が対立する論争においては、因果律一般の問題へと波及した抽象度の高い論理闘争になることを具体的に示した。全体としては、「因果性確定問題」（特にanvaya-vyatireka法）を軸として、インド哲学諸学派の因果性をめぐる諸議論を比較検討することによって、因果性をめぐり学派横断的に共通する問題意識と学派特有の思想的特殊性がいつそう明確になることが本パネル発表によって明らかになった。

(2) 「因果性と時間」に関しては、結果に対する原因の時間的先行性や同時因果の可能性など種々の論点に関係するが、仏教とバラモン系諸学派との争点になるのが仏教の刹那滅因果論であり、業の主体としてのアートマンを認めない無我説である。ヴェーダーンタ学者パースカラによる仏教批判の箇所は加藤氏によって解説された。またニヤーヤ学派とミーマーンサー学派による批判に対する仏教側の再批判の詳細は『タットヴァサングラハ（・パンジカー）』第9章の精読によって明確となった。他方、丸井は『ニヤーヤ・マンジャリー』第6章の文意認識過程説明をめぐる学派内論争を解析して、文意理解成立に至るまで因果系列のもとで継起する一連の知（いずれも瞬間的存在）の連続を説明するこのニヤーヤの理論においても、仏教の刹那滅因果論との近似性が認められるが、消滅には原因ありとする点と、知は発生刹那の次の向消滅状態の刹那まで存続し、第二刹那まで因果効力ありとする点が異なることを指摘した。「因果性の本質」に関しては、因果性定義から了解される新ニヤーヤ学派の因果性概念の本質は、Aの直後にBが必ず発生するという規則性にほかならず、その点でヒュームの経験論に接近するが、その規則性が推理の妥当性を根拠付けると考えることによって、推理の妥当性が絶対的に保証されることはないとするヒュームの懐疑論とは異なることを和田氏は明らかにした。最後に「因果と超越」については、桂氏が水野弘元氏そのほかの先行研究を参照しつつ、「無為」と「涅槃」を縁起ないし因果性との関係から再検討し、涅槃を「生者必滅」の通常の因果律から外れた「離繫果」（原因を持たない結果）として説一切有部が特別視していたように、「因果性の超越」は仏教徒が涅槃を論ずる上で重要な視点になることを関係資料に即して研究ノートで明確にしたが、これは仏教論理学者たちが究極的真理のもとでは因果性の超越がはかられることを稲見氏が指摘した点と重なる。またシャンカラが解脱知を人間の努力の結果とは捉えない立場や、ヴァイシェーシカ学派の解脱観に含まれた「苦の滅」は始まりがあって終わりが無い「已滅無」として位置づける考え方とも相通ずる。因果性の超越は、解脱を最終目標とするインド哲学諸派がある種共有する問題意識であった可能性が示唆されたことになる。

(3) 本研究の活動記録と主要な研究成果（論文、翻訳、講演録、研究ノート、口頭発表原稿など）を収録した253頁の「成果報告書」を丸井の編集により作成した。未発表の研究ノートが若干含まれ内部文書にとどまるが、今後の啓蒙書刊行に資する予備資料としても意味を持つ。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 20件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI	4. 巻 -
2. 論文標題 Pre-Dharmakirti Interpretations of Dignaga's Theory of paksabhasa	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI	4. 巻 70（記念特集号）
2. 論文標題 世俗の真実とは何か クマーリラの批判に対するブラジュニャーカラグプタの回答	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI	4. 巻 67-1
2. 論文標題 仏教教論理学派の論証式	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (155)-(162)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA	4. 巻 67-2
2. 論文標題 インド哲学における因果性確定の方法をめぐって（第69回学術大会パネル発表報告）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (232)-(233)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆宏 Takahiro KATO	4. 巻 28
2. 論文標題 初期不二元論派におけるanvayavyatireka説再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 インド哲学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆宏 Takahiro KATO	4. 巻 21
2. 論文標題 ウィルヘルム・ハルプファス著『インド思想における業と再生』 第5章「ヒンドゥー教の哲学諸体系における業と再生」和訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生田哲学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆宏 Takahiro KATO	4. 巻 -
2. 論文標題 The Interpretation of mithyajnananimitta in the Pancapadika	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Vedanta Science and Technology: A Multidimensional Approach	6. 最初と最後の頁 104-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA	4. 巻 56-57
2. 論文標題 The Mode of Argumentation in the Fangbian xin lun/*Upayahrdaya	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA	4. 巻 第19輯
2. 論文標題 龍樹の仏陀観 ; 『根本中頌』に登場する「単数形のブツダ」と「複数形のブツダ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒澤大学 祝禱文化講演集	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA	4. 巻 38
2. 論文標題 ブツダの教え 此れあれば、彼あり。此れなければ、彼なし	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野大学 日曜講演会講演集 「心」	6. 最初と最後の頁 12-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸井 浩 Hiroshi MARUI	4. 巻 93別冊要旨
2. 論文標題 インドにおける因果の思想を考える 物理的因果と因果応報	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 317-318
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎 陽一 Yoichi IWASAKI	4. 巻 68-2
2. 論文標題 「一瞬」を測る方法 新ニヤヤー学派における刹那の形而上学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (23)-(30)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA	4. 巻 97
2. 論文標題 Causality in Early Navya-nyaya: The Definitions of cause-ness formulated by Sasadhara	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annals of Bhandarkar Oriental Research Institute	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA	4. 巻 65
2. 論文標題 初期新ニヤーヤ学派の因果性とD・ヒュームについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海仏教	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA	4. 巻 68-1
2. 論文標題 新ニヤーヤ学派における非存在 (abhava) の記述/定義と 神話性 について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (34)-(38)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA	4. 巻 10
2. 論文標題 初期新ニヤーヤ学派シャシャダラによる原因の定義について 『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』 「原因性章」の翻訳研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 インド論理学研究	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA	4. 巻 66-1
2. 論文標題 初期新ニヤヤ学派における原因の概念 シャシャダラの定義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 486-492
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO	4. 巻 39
2. 論文標題 ヨハネス・ブロンクホルスト著『古代インドの瞑想---その二つの系譜』第1部「瞑想の二つの伝統」和訳	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 53-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA	4. 巻 65-3
2. 論文標題 A History of Navya-nyaya Study and Its Future: From the Methodological Point of View	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 (35)-(43)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA (Brendan Gilon と共訳)	4. 巻 20
2. 論文標題 English Translation of the Upayahrdaya (pt. 1)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Tibetan Studies	6. 最初と最後の頁 195-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI	4. 巻 65-1
2. 論文標題 宝石の光に対する宝石の認識	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 (138)-(145)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO	4. 巻 None
2. 論文標題 Bhaskara 's Jnanakarmasamuccaya Interpretation of the Bhagavadgita	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of International Seminar on Sanskrit Literature and Human Values	6. 最初と最後の頁 33-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計33件 (うち招待講演 13件 / うち国際学会 15件)

1. 発表者名 丸井 浩 Hiroshi MARUI
2. 発表標題 インドにおける因果の思想を考える 物理的因果と因果応報
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸井 浩 Hiroshi MARUI
2. 発表標題 パネル発表A 「インド哲学における因果性確定の方法をめぐって」趣意説明
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会 (東洋大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu Katsura
2. 発表標題 パネル発表A 「インド哲学における因果性確定の方法をめぐる」司会・コメンテーター
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会（東洋大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO
2. 発表標題 The Concept of Responsibility in Indian Tradition
3. 学会等名 22nd International Congress of Vedanta（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO
2. 発表標題 Meditation in Sankara's Advaita Vedanta
3. 学会等名 10th Wonkwang Yoga Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO
2. 発表標題 初期不二一元論派（Advaita-Vedanta）におけるanvaya-vyatireka説再考
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会パネル発表A（東洋大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩崎 陽一 Yoichi IWASAKI
2. 発表標題 新ニヤーヤ学派における刹那 (ksana) の存在論 ラグナータの議論を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩崎 陽一 Yoichi IWASAKI
2. 発表標題 ヴァイシェーシカ学派の世界制作者論証における因果律の問題
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会パネル発表A (東洋大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA
2. 発表標題 初期新ニヤーヤ学派における非存在 (abhava) の分類について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA
2. 発表標題 初期新ニヤーヤ学派における因果性の定義について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会パネル発表A (東洋大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA
2. 発表標題 初期新ニヤーヤ学派における原因の概念 シャシャダラの定義
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第68回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI
2. 発表標題 Conventional Validity Prajnakaragupta's Interpretation of PV II 4d-5a
3. 学会等名 The Workshop of Prajnakaragupta and Yamari (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI
2. 発表標題 仏教論理学派における因果性確定をめぐる議論
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会パネル発表A (東洋大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊 眞儀 Masayoshi WATANABE
2. 発表標題 Perceptibility of Time in Nyaya-Vaisesika Philosophy
3. 学会等名 The 17th World Sanskrit Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸井 浩 Hiroshi MARUI
2. 発表標題 Potentialities of Buddhist Thought for Our Future World: Searching for a Global Wisdom for Transcending the Principle of Competition and Conflicts
3. 学会等名 IV Forum: Buddhist Thought and Contemporary Issues, F.G.S. University Presidents Forum (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸井 浩 Hiroshi MARUI
2. 発表標題 What is the "human development" in Indian and Buddhist thought?
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy (Beijin 2018), Invited Session: Paradigm of integral human development in Indien thought (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu Katsura
2. 発表標題 Mark Siderits on anumana
3. 学会等名 2019 Numata Symposium in Honor of the 35th Anniversary of the Numata Chair Program (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu Katsura
2. 発表標題 bhava, abhava, svabhava and parabhava in the Mulamadhyamaka-karika, chapter 15
3. 学会等名 第四回国際中観ワークショップ, (国際仏教学大学院大学) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA
2. 発表標題 Causality in Early Navya-nyaya: The Definitions of Cause Formulated by Sasadhara
3. 学会等名 17th World Sanskrit Conference (The University of British Columbia, Vancouver), (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO
2. 発表標題 The Concept of Dharma in Indian Tradition
3. 学会等名 International Conference of Indian Society for Indic Studies on Applied Ancient Wisdom for Transformational Leadership (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO
2. 発表標題 Ahimsa, Unity (abheda), and the Realization of the Truth
3. 学会等名 19th International Conference of Chief Justices of the World (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤 隆宏 Takahiro KATO
2. 発表標題 The Development of the Concept of Avidya in Vivarana Tradition
3. 学会等名 49th All India Oriental Conference (Somnath Sanskrit University, Veraval) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸井 浩 Hiroshi MARUI
2. 発表標題 My Final Remark on the Issue of Authorship of the Nyayakalika Attributed to Jayanta, the Great Kashmirian Poet-Philosopher
3. 学会等名 Lecture at the Department of South Asian Studies, Harvard University (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA
2. 発表標題 " Bhaviveka ' s Proof Formulae Estimated by Dignaga ' s Logic,
3. 学会等名 International Workshop on Bha;viveka and Buddhist Logic, 浙江大学, (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA
2. 発表標題 The Four Yoga Stages of the Prajnaparamitopadesa
3. 学会等名 XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, Toronto University (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田 壽弘 Toshihiro WADA
2. 発表標題 インド哲学における因果関係 初期新ニヤーヤ学派の原因の定義についての一考察
3. 学会等名 東海印度学仏教学会第63回学術大会, 名古屋大学
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA
2. 発表標題 近現代日本因明研究百年史
3. 学会等名 第二回国際因明学会、浙江大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA
2. 発表標題 Did the Buddha teach any dharma according to Nagarjuna?
3. 学会等名 Buddhist Studies Workshop Lecture, プリンストン大学（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA
2. 発表標題 The Two Traditions of Indian Logic: Vada and Pramana
3. 学会等名 International Seminar On Logic, Ethics & Epics: Homage to Professor Bimal Krishna Matilal（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 桂 紹隆 Shoryu KATSURA
2. 発表標題 Outline of the Prajnaparamitopadesa of Ratnakarasanti
3. 学会等名 Mahidol University, Thailand（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲見 正浩 Masahiro INAMI
2. 発表標題 Pre-Dharmakirti Interpretations of Dignaga's Theory of paksabhasa
3. 学会等名 XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩崎陽一 Yoichi IWASAKI / 日比真由美 Mayumi HIBI
2. 発表標題 What is New in Vallabha's Defence of the Bodiless World-Maker in Nyayalilavati
3. 学会等名 Templeton International Workshop: Realism/Anti-Realism, Omniscience and God/No-God (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 丸井 浩
2. 発表標題 「インド哲学」は宗教と不ー不異か 日本の ニヤーヤ学 研究の回顧と展望をかねて
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第67回学術大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	和田 壽弘 (WADA Toshihiro) (00201260)	名古屋大学・人文学研究科・教授 (13901)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	桂 紹隆 (KATSURA Shoryu) (50097903)	龍谷大学・公私立大学の部局等・フェロー (34316)	
研究分担者	稲見 正浩 (INAMI Masahiro) (70201936)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	加藤 隆宏 (KATO Takahiro) (80637934)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	岩崎 陽一 (IWASAKI Yoichi) (40616546)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	